特集 800号記念特集

順天堂医学. 2005, 51
P. 472~474

文理紀要から『順天堂医学』への変遷

大村 至*

ITARU OMURA

文理学紀要は37号を最後にして、『順天堂医学』43巻から一般教養関係の論文が掲載されることになった。一般教育として別枠に載ることもあるので、ご存じの方も多いと思われる。文理紀要の変遷について由緒ある『順天堂医学』に掲載されるまでの経緯を簡単に紹介する。

文理紀要の前身は昭和33年に順天堂大学体育学部紀要として、当時学舎のあった習志野で誕生した。出版は習志野研究委員会であり、体育・保健・一般教養の3分野の教員で構成されていた。体育学部紀要として1号から10号まで年1回の発行が続き、広い範囲の論文が掲載され、いささか雑然とした感があった。体育実技の挿入画の次には数式の並んだ論文が並ぶこともある状態であった。研究教育の充実と論文数の増加があり、分野が多面に渡るため10号で終了し、昭和43年から保健体育紀要と文理学紀要に分割して11号から新規発行となった。発行は、以前と同じく習志野研究委員会が継続し、編集委員も2つの紀要を兼ねていた。

文理紀要に所属していた研究室は、多少の変遷はあったが毎号掲載された活動報告によれば、外国語1・外国語2・人文科学・社会科学・数学統計学・物理学・化学・生物学・哲学・心理学・保健体育学であった。これらの教室のメンバーは、教授から助手まで入ると30名以上の教員が所属していた。時には体育学部生化学教室からの投稿もあり、逆に体育学紀要へ一般教養からも投稿

されていた。発刊は年の12月の年1回であった。論文の査読はほとんどが習志野キャンパス内で行われ、各専門分野のスタッフ人数は少なく査読に非常に苦勞していた。ある教室から提出された論文の査読はその教室の教授が行ったり、近い分野の研究室にお願いしたり、時には医学部の先生にお願いしたり、どうしようもない場合に限り学外の専門家に密かにお願いするような事態もあった。その点査読が十分なされたい場合もあり、問題があったのは事実である。『順天堂医学』からの査読が依頼されることもたまにはあった。この頃でも習志野の紀要と『順天堂医学』は細々とした交流があった。研究体制の充実と各教員の頑張りもあり、2種の紀要の存在が、既に定評のある『順天堂医学』と共に他大学で次第に評価が高くなってきた。図-1を見て頂くと分かる様に、増減はあるが人数の割には紀要の論文数は多い様に思われる。当然ながら紀要以外にも教員の研究は、専門誌への投稿も継続されていた。この体制が急に変化し始めた最初が昭和63年、習志野から遠く印旛郡印旛村に移転した時である。大学移転は決定したが、候補地は上がってもなかなか移転先が決まらず、落ち着かない日々を過ごし、決まった後には引っ越しの準備に忙しかった事を記憶している。このためか、昭和63年の移転直前2年間は、掲載数も非常に減少している。移転終了が3月であり、前2年間の論文を出そうとしたのか、論文数も以前と同様に復活したと見えた。しかし移転後の整理に忙しかったのか、次年度は論文数が急に減っている。

紀要の内容や論文数などは、教育組織の変化に

* 順天堂医学編集委員

順天堂大学医学部物理研究室助教授

〔June 28, 2005 原稿受領〕

図-1 文理学紀要と順天堂医学掲載論文数

伴い変化するが、一般教養の劇的な変化が表れたのは平成3年であった。この時既に医学教育6年一貫の方針が決まり、教養の期間は1年と9ヵ月の変則的なカリキュラムが組まれていた。さらに当時の文部省より大学設置基準大綱化が発表され、教養教育の存在意義が不明となった。国立大学では東大を除いて、一般教養学部ないし一般教養部は廃止してしまい、私立も同様であった。一般教養を専門科目に読み替え可能となり、一般教養科目が皆無となった大学も随所に現れ始めた。当大学でも一般教養に関する議論が各所で行われ、一般教育不要論までも飛び出す状況であった。一般教養に関しては、体育学部から改組転換したスポーツ健康科学部と医学部を担当し、教員の所属も医学部とスポーツ健康科学部所属に分かれていた。そして全員スポーツ健康科学部の教授会に参加決定していたのであるが、一般教育委員会なる組織もかなり独立性の高い委員会として存在していた。スポーツ健康科学部に医学部所属の教員

が構成メンバーとなっている点を文部省から指摘され説明に苦労したという話を聞いている。しかし大綱化で今までの組織では通用しなくなる事は確かであり、ましてや一般教育の独立は考えられない状況であった。他大学でもセンター構想や、今までの一般教育の教官は専門学部所属し、学部から一般教養に相当する教育を行う例が増加してきた。語学などは非常勤講師の増加があったように記憶している。大綱化の発表された平成3年の文理学紀要34号は、6ヵ月遅れ平成4年の6月に発行された。しかし論文数が減ったわけではなく原著6編と教育資料3編が掲載されている。その後、文理学紀要35号は平成5年3月に発行されているので、1年間発行されなかったことになってしまった。

大学設置基準の大綱化を受けて、本大学も今まで一般教養を受け持っていた教官は医学部とスポーツ健康科学部の所属に分かれたが、所属を越えて兼任の形で教育を続ける事になった。この時

から医学部所属の研究室は、外国語・社会科学・数学・物理学・化学・生物学の6教室のみとなり、人文科学・哲学・心理学・保健体育学の教室はなくなり、統計数学教室から統計が消えた。一般教養構成メンバーも講師助手を入れても20名を少し超す程度となってしまった。数学と社会学は研究室の人員が1名だけで、各教室の定年教員の補充がなかったために、教員数は少なくなったが、論文の数はあまり変わらなかった。問題点として査読を今までと同じく継続可能か、質も保持できるか内部のメンバーでさえも心配な状況であったが、少数でも頑張れば継続可能だろうと考えていた。しかし、文理紀要はもう研究成果として認められないと言われ、文理紀要に掲載されていた様な論文は、代わりに『順天堂医学』に吸収すると指示があった。確かに、人数や部門での査読可能であるか、スポーツ健康科学部と今までと同じように編集委員会を作ることが良い事であるか、人数的に編集委員会に必要なだけの編集委員が確保できるかなどである。文理紀要を継続するに、査読だけでも医学部やスポーツ健康科学部の教員に手数を掛けなければならず、一部は大学内で手に負えない様な数多くの問題を抱える様になった。編集の困難さに加え、業績と認められないとの通達を受けた以上、文理紀要廃止も仕方なしと

考える向きもあった。実際に文理紀要は37号で廃刊となり、新たに平成8年(1996)に順天堂大学一般教養紀要1号が発行され、同時に保健体育紀要もスポーツ健康科学研究と変更され1号が発行された。一般教養紀要は順天堂大学一般教養紀要編集委員会発行となり編集者は医学部所属の一般教養担当者3名だけであり、表紙の下に順天堂大学医学部の文字が印刷されている。この年に限り医学部からは『順天堂医学』と、一般教養紀要の2つの研究雑誌が発行された。時の小川秀興医学部長(現理事長・学長)から一般教養紀要を『順天堂医学』43巻から吸収合併し、若い人材を育てるために業績として認めるとの配慮があった。43巻には5論文と2資料が投稿掲載されたが、以後投稿数が減少してきた。これには、せっかく投稿しても医学と名が付くために他大学の図書館では医学に分類され、関係の人の目に届かない。医学と名が付いているからには医学的な内容を要求されている。これらの思惑と、一般教育に従事している教員数が13名と激減したことなどが原因と思われる。『順天堂医学』にも一般教育からの投稿が一次途絶えたが、最近少しずつ増える傾向が見られる様になったのではないかと考えている。